

孤立話から見る『宇治拾遺物語』の特質

——仏教の世俗化と本覚思想——

廣 田 收

はじめに

概観するに、『宇治拾遺物語』には、(一)古代インドのジャータカから発して中国の仏典などに多数の出典を有する説話群がある(五色鹿、留志長者、僧伽多など)。これらは仏教の伝播・受容と日本化という課題が予想される。また、(二)外国の文献としての出典は知られてはいないが、『今昔物語集』とだけ同一説話を共有する説話群がある(袴垂、鼻高き僧、元輔落馬など)。これらはおそらく共通の祖であると指摘されることの多い『宇治大納言物語』との関係が問われるものである。これらが日本において生成された説話である可能性は高いが、仏教説話と世俗説話との相違が課題として

予想される。さらに、(三)直接的な出典の明らかでない説話が多数存在する。その中には、成立過程や伝播論などの問題を留保して言

えば、昔話と同じ話型を共有する話群がある(瘤取翁、腰折雀、博徒婿入など)。これらはジャンルは異なるにしても、話型を媒介に比較を試みることが可能である。いずれにしても、所収の説話は、出典や同一説話、類似説話を比較対照させることによって、『宇治拾遺物語』の特質を明らかにすることが有効である^①。

ところが、さらに(四)同一説話の存在も類似説話の存在すらも知られていない、『宇治拾遺物語』だけに伝わる説話がある。ただ、これらは言葉の正しい意味で「孤立」しているということは考えにくい。ここでは他に類話の存在が知られていないということをもって「孤立」しているという意味で、これを鍵括弧付きの意味で「孤立話」と呼んでおくことにしたい。

なぜ孤立話に注目するかといえば、このような孤立話は、『宇治拾遺物語』だけに存在するという点において、まさに『宇治拾遺

物語』の独自性を体現するものであり、孤立話のうちに『宇治拾遺物語』の特質は集約されているのではないかと愚考するからである。そのような問題意識から、ひとつの事例として、第一五四話「貧俗観仏性富事」を検討してみたい。

一 問題点の所在

第一五四話の本文は次のようである。

今は昔、唐の辺州に一人の男あり。家貧しくして宝なし。妻子に養ふに力なし。もとむれども得る事なし。かくて年月を経。思ひわびて、ある僧にあひて、宝を得べき事を問ふ。智恵ある僧にて、こたふるやう、「汝、宝を得んと思はば、たゞ①実の心をおこすべし。さらば宝も豊に、後世は良き所に生まれらん」といふ。

この人、「②実の心とはいかゞ」と問へば、僧の云、「③実の心をおこすといふは、他の事にあらず。仏法を信ずる也」といふに、又問ひて云、「それはいかに、たしかにうけ給りて、④心を得て、たのみ思て、二なく信をなし、たのみ申さん。うけたまはるべし」といへば、僧のいはく、「⑤我心はこれ仏也。⑥我心をはなれては仏なしと。しかれば、⑦我心のゆゑに、仏はいますなり」といへば、手をすりて、泣く／＼拝みて、それ

より此事を⑧心にかけて、夜昼思ければ、梵、尺、諸天来りてまもり給ければ、はからざるに宝出きて、家の内豊になりぬ。命終るに、いよ／＼⑨心、仏を念じ入て、浄土にすみやかに参りてけり。

この事を聞き見る人、たふとみあはれみけるとなん。^③
本説話の概要を、説明を加えつつ辿っておこう。

貧しい男が「思ひわびて」僧某に「宝を得べき事」を尋ねる。男の願いはきわめて現実的なものであり、妻子を養い、蓄財をなすことであつた。ところが「智恵ある僧」は、「宝」の意味をずらす、それこそ説法というものである。曰く「汝、宝を得んと思はば、たゞ①実の心をおこすべし。さらば宝も豊に、後世は良き所に生まれらん」と。①「実の心」を持って、そうすれば財宝も豊かになるし、来世も極楽に行ける、というのである。現実的、実利的に儲ける方から考えるな、まず①信仰を持って、と。信仰とは、浄土系の立場に立てば、そもそも来世への願い、極楽浄土を欣求することであるはずである。それを中心に据えて考え方、生き方を根本から変えろというわけである。男が、それでは②「実の心」とはどういうものなのかと尋ねると、僧は③「実の心をおこす」ということは、「仏法を信ずる」ことであるという。男は、わかつた、④「心を得て」つまり「仏を頼み、一心に信仰し（仏を）頼みたい」という。する

と、僧は「⑤我心はこれ仏也。⑥我心をはなれては仏なし。しかれば、⑦我心のゆゑに、仏はいますなり」と言い放つ。

それ以降、男が⑧信仰心を昼夜を問わず持ち続けると、梵天・帝釈など諸天が男を護り、思いがけなく財宝を得て、家内は裕福になったという。それで男はますます⑨信仰心を深め、仏を念じて死して極楽に赴いたという。この事を聞き見る人は、尊く思い感激したと伝える、というものである。

この説話が興味深いのは、「仏教的」な装いをもちながら、まさに『宇治拾遺物語』独自の世俗説話であることにある。例えば、新大系は、次のように批評する。

本話は仏教説話と同じ骨格を持ちながらも、「宝出きて、家の内豊に」とある通り、世俗生活での富裕、幸福も否定していない。仏教説話のある種の堅苦しさからのがれているといえる。一五二話から本話まで中国説話が連続するが、孔子と問答した童の質問には単純さ、素朴さがあつたし、鄭大尉の孝心には素直な純朴さがあつた。本話には至醇な信仰がうかがえ、三人の人物のありようは通底しているといえよう。^④

新大系は「仏教説話のある種の堅苦しさからのがれている」という。興味深い指摘である。ただ、そうであるならば、本説話の主張するところは「至醇な信仰」というだけでよいだろうか。

孤立話から見る『宇治拾遺物語』の特質

『宇治拾遺物語』が本説話を平安京のものとして描くのであれば、厭離穢土・欣求淨土という淨土系の思想からすると、現世を否定し来世に救いを求めることは、本説話の内容はなじまないものとなる。なぜなら、本説話にあつては、現世の幸福と、次元の異なる来世の救済とは同一線上にあるからである。

二 『宇治拾遺物語』の成立時期と宗教思想

ここで問題になるのは、『宇治拾遺物語』の成立時期と、成立基盤である。

『宇治拾遺物語』の成立時期については、一般に鎌倉初期とされる。例えば、中島悦次氏は、一一二〇～一一二五年頃とする。新大系は、『古事談』を出典とすることから、成立の上限を、建暦二（一一二二）年から建保三（一一二五）年頃と推定している。^⑤

それでは、『宇治拾遺物語』は鎌倉新仏教の洗礼を受けているのか。あるいは、鎌倉新仏教の勃興を背景（基盤）として『宇治拾遺物語』は成立しているのか。簡単に一覽してみよう。

（生没年）

（出来事）

法然	一一三三～一一二二年。	一一七五年、淨土宗を開く。
栄西	一一四一～一一二五年。	一二〇一年、建仁寺を建立。
新鸞	一一七三～一二六二年。	一二〇一年、法然の弟子と

なる。

道元 一一〇〇～一二五三年。 一二四三年、永平寺を建立。

日蓮 一二二二～一二八三年。 一二五三年、日蓮宗を開く。

何度考えても、私には『宇治拾遺物語』が特定の宗派の影響を直接受けたとする確証が持てない。むしろ『宇治拾遺物語』が鎌倉新仏教の隆盛に向かう時代の空気、同じく呼吸したであろうことを想像するだけである。むしろ、この説話は、民間信仰的な習合が認められるのであって、明確な仏教的立場をとっていない、ということをお願いであらう。

なぜかという、本説話は、富や財を得ようとすれば、商才や策を弄することを考えてはいけない。むしろ「実の心」＝仏法を信じよ、信仰をもつて生きろ、という。此界のことは知らず、現世において生きて行くためには信仰を旨とせよという、逆転の発想の必要を述べているように思う。もう少し言えば、世俗の倫理を説いているとみえる。例えば、五悪は、世俗者の守るべき戒律であるが、考えてみれば、そんな厳しい戒律は守れるはずがない、というのが当時の常識とすべきものだろう。

私が興味をもつのは、「我心はこれ仏也」以下の僧の言葉である。この表現について、従来の注釈は、例えば旧大系は、

観無量寿経に「諸仏如来是法界身、入一切衆生心中。是故

「汝等心想仏時。是心即是三十二相隨形好。是心作仏是心是仏」とあり、天台疏には「是心作仏者。仏本は無。心淨故有。亦因三昧心終成作仏也。是心是仏者。向開仏本は無。心淨故有便謂然有量。故言即是。心外無仏亦無因也」とある。^⑥

と仏典を挙げる。さらに、新大系は旧大系を踏まえて、『観無量寿経』に「華嚴経」を加えて次のように言う。

観無量寿経に「諸仏如来是法界身、(略)是心作仏是心是仏」とあり、僧の言葉はこの趣旨に添う。また「華嚴経曰、三界唯一心、心外無別法、心仏及衆生、是三無差別」(観心略要集)ともかかれ、唯識教学では根本的な思想となっていた。^⑦

前者の指摘する『観無量寿経』の一節は、釈尊が弟子の阿難と夫人韋提希とに告げて次のように説く条である。

仏告阿難及韋提希。見此事已。次当想仏。所以者何。諸仏如来是法界身。遍入一切衆生心中。是故汝等心想仏時。是心即是三十二相八十形好。是心作仏是心是仏。諸仏正遍知海従心思想生。是故应当一心繫念諦觀彼仏多陀阿伽度阿羅呵三藐三仏陀。(以下略)^⑧

また、後者の指摘する『観心略要集』は、周知のように源信の著作であり、「理観と称名とが究極的には円融すると説く」ことが「本書の要旨」であるという。すなわち「観心を念仏の究極である

とし、天台教学の『止観』の上に念仏を位置づけた」ものという。^⑨

改めて『観心略要集』の本文を読むと、「観法」が「諸仏之秘要。衆教之肝心也」であるとして、第一に「娑婆界過失」を挙げる。さらに第二に「念仏」に寄せて「観心」を明らかにすることを挙げる。この第二の命題についての注釈として、「釈尊勸曰」「弘決云」「釈籤云」と諸書を引き注解を加えて行く。すなわち、

釈籤云。如_キ於_テ夢中修_レ因感_レ果。夢事宛然即_レ仮也。(略)修

性不二。万法唯心。以_レ之可_レ悟。諸法万差無_レ不二心。華嚴經

曰。三界唯一心。心外無_レ別法。心仏及衆生。是三無_レ差別云云。義例云。唯於_二万境_一、観於_二一心_一（考・一本作観一念心）万

境雖殊妙觀理等云云。止観云。如下破_二微塵_一出_中大千經卷。恒沙

法一中中曉云云。起信論云。三界ハ虚偽ニシテ唯心ノ所作ナリ。

（以下略）^⑩

と続いて行く。

説話の本文解釈にあたって、問題は恣意的な読みの暴走をどのようにして抑制するかである。と同時に、注釈の孕む陷阱をどう警戒するかである。すなわち、この場合であれば、説話の表現を仏典に還元することによって、説話の独自性、個性性が等閑視されかねないということ、私は懼れる。表現の淵源を辿れば、いずれ典拠は観経や観集などに至るのであるが、説話の表現は、むしろ仏説よ

りも本朝における世俗の受け止め方を示しているとみるべきだろう。

説話において、僧の言うところによれば、「実の心」とは「仏法を信ずる」ことと同義である。そこで男は「仏法を信ずる」心を起こし、「二なく信をなし」たいと誓う。さらに、僧は「我心はこれ仏也」であり、「我心のゆゑに、仏はいますなり」と言う。

ここに仏教化における単純化、世俗化がある。「実の心」は、『今昔物語集』にいう「至誠心」に対応するであろう。しかるに、本説話では「仏法を信ずる」ということに単純化されている。つまり、簡潔に説明する、という意味で世俗化が認められる。しかも、僧は自分が、僭越ながら仏であるとまでいうとみえる。

すでに田村芳朗氏は、大乘仏教において「心性本浄が強調された」ことを指摘し、「心を強調した例」として『維摩経』の「隨其心浄則仏土浄」（新修大正大藏経第一四卷五三八頁、下段）を挙げ、『華嚴経』における「唯心ないし一心の強調」を指摘されている。^⑪ 田村氏は、『観心略要集』（伝源信）の「己心見_二仏身_一。己心見_二浄土_一」（『日本仏教全書』第三一巻、一六一頁）などを挙げ「凡夫の己心・一心に仏を見、浄土を観ずるということ」で「仏と凡夫の空間的へだたりを埋めつくしたものである」ともに、「一念にたちまちにして仏がつかまれるということ」を意味するとしている。^⑫ つまり、上記のような思考は、注釈の指摘する唯職を否定するもので

はないが、むしろ日本の本覚思想のものと見るほうが適切ではないだろうか。

田村氏の述べるように、親鸞・道元・日蓮たちの活躍する鎌倉新仏教の時代と、天台本覚思想との関連に注意する必要があるという指摘は、こと『宇治拾遺物語』の成立する鎌倉初期の思想的基盤としても留意される必要がある。

例えば親鸞に即して田村氏は、『末燈鈔』「信心まことなる人をば仏とひとしともまふす」に仏凡一如を、『教行信証』信巻に「一切衆生悉有仏性」を取り上げていることに注目する。かくて「天台本覚思想は生死・無常の実存的現実のみならず、無明・煩惱の日常的現実までも肯定」することに至った。そこには「仏教以外の思想」が関与していること、すなわち「日本思想」があるという¹³⁾。

本説話を読む上で、このような指摘は極めて重要である。およそ外来の仏教が日本に浸透する過程で、思想的基盤としての在来の思想と習合して行くことを余儀なくされたことは否定できないであろう。私は、日本仏教、特に鎌倉仏教において、各宗派の宗祖が神格化され尊格と並び称されるところに、もつと古い日本の思考が働いていると見る。それは、神を祭祀する祭祀者が、神格化されるという構造であり、古く辿れば「みこともち」の思想である。すべての教義や教理を措いて、これほど簡潔に信仰を述べおおせたところ

に、日本的で中世的な日本仏教のありかたが示されているだろう。極論すれば、キリスト教では、神はあくまで人の外にあり、絶対的な他者である。ところが、僧は私の中に、仏性は私にある、私の心を離れて仏はない、だから私の中に仏が在る、という。ここにいう⑤⑥⑦「心」とは感性であり、認識の謂である。

三 『宇治拾遺物語』における「心」の意味

ここにいう『宇治拾遺物語』の表現の「心」と、仏典の「心」とは果たして同義であろうか。本説話において繰り返し用いられる「心」という語は、説話解読の鍵である。この理解を検証するために、話末評語だけに限定せず、『宇治拾遺物語』の全体にわたって「心」という語が（複合語ではなく）単独で用いられるすべての用例を検索してみた¹⁴⁾。すると、「心」の語義は、おのずと次のように分類することができる。

- (1) 慣用的表現
- (2) 心情・気持ち・気分之意
- (3) 分別・判断・考えの意
- (4) 心の持ち方・人の器の意
- (5) 仏教的な認識・宗教的思惟
- (6) 意義・意味の意

この中で、今問題とする、信仰の義で用いられる事例は(5)である。すなわち、次のような事例である。

○それが和泉式部が行きて臥したりけるに、めざめて、経を心をすまして読みけるほどに、

(第一話「道命阿闍梨於和泉式部許読経五条道祖神聴聞事」)

○いささか帰依の心をいたして、

(第四話「多田新発意郎事」)

○いささかわれに帰依の心のおこりし功によりて、

(第四話「同」)

○道心のおこりければ、よく心をかためんとて、

(第五九話「三川入道、遁世事」)

○心を西方にかけんには、なんぞ心ざしをとげざらん。

(第七三話「範久阿闍梨西方を後にせぬ事」)

○たのもしきが、心のくちをしくて、

(第八五話「留志長者事」)

○目に見えぬものなれど、誠の心をいたしてうけとりければ、

(第八六話「清水寺二千度すぐ六に打入事」)

○「よしなし。さる無仏世界のやうなる所に帰らじ。こゝにある」
「なん」と思ふ心付きて、東大寺といふ所にて受戒せんと思て、

(第一〇一話「信濃国聖事」)

○「心のよく誠をいたして、清く書奉りたる経は、さながら王宮に納られぬ。汝が書奉りたるやうに、心きたなく、身けがらはしうて書奉りたる経は、広き野に捨て置たれば、その墨の、雨に濡れて、かく川にて渡る也。

(第一〇二話「敏行朝臣事」)

○ありつる有様、願をおこして、その力にてゆるされつる事など、あきらかなる鏡に向たらんやうにおほえければ、いつしか我力付て、清まはりて、心清く四巻経書き供養し奉らんと
思けり。

(第一〇二話「同」)

○猶もとの心の色めかしう、経仏の方に心のいたらざりければ、此女のもとに行、あの女けしやうし、いかでよき歌よまんと
思ける程に、

(第一〇二話「同」)

○暫の命を助けて返されたりしかども、猶心のをろかに怠りて、その経を書かずして、つひに失にし罪によりて、

(第一〇二話「同」)

○「今宵の夢に、故敏行朝臣の見え給つる也。四巻経書奉るべかりしを、心のおこたりに、え書供養し奉らずなりにし、その罪によりて、きはまりなき苦を受くるを、

(第一〇二話「同」)

○此婆羅門の様なる心にも、あはれに尊くおほえて、

(第一二三話「海賊発心出家事」)

○受戒とげんと心あらば、送らん」といへば、さらに受戒の心も今は候はず。
(第一二三話「同」)

○この婆羅門のやうなるものの心に、さは仏経はめでたく尊くおはします物なりけりと思て、この僧に具して山寺などへいなんと思ふ心つきぬ。
(第一二三話「同」)

○すこし心のある者は、「などかうは、此聖はいふぞ。」

(第一三三話「空入水シタル僧事」)

○孝養の心、空にしられぬ。
(第一五三話「鄭太尉事」)

○下の聖、我ばかり貴き者はあらじと驕慢の心のありければ、仏のにくみて、まさる聖をまうけて、あはせられけるなりとぞ、かたり伝たる。
(第一七四話「優婆崛多弟子事」)

○女犯の心なき証果の聖者なる」
(第一七四話「同」)

○身のかざりとし、心のおきてとするもの也。

(第一八三話「大将慎事」)

これらは、(5)仏教的な文脈における典型的な事例といえるだろう。

ところで、『宇治拾遺物語』の中で、特定の教義や教理に則した仏教思想ではなく、在地の(あるいは、都市のものであるのかもしれないが)習合思想によると考えられる説話に、次のようなものが

ある。

四 孤立話第一一〇話「ツネマサが郎等仏供養事」

孤立話である第一五四話における仏教の世俗化と共鳴する説話が、これも孤立話である第一一〇話である。それでは、どのように共鳴しているかを検討してみたい。

その概要は次のようである。昔、筑前国山鹿庄に「恒正」^{つねまさ}が住んでいた。その配下に「政行」^{まさゆき}という郎等がいた。またそこに滞在する男がいた。旅の男は、政行が造仏供養に際して自邸に人々を招き饗宴を催していると聞き付けた。旅の男がようすを尋ねると、饗宴は盛大に行くというので、田舎の風習を不思議なことと思つた。講師はこの旅人の随伴者であつた。供養に招かれた講師は「何仏を供養し奉るにかあらん」と尋ねた。恒正はなるほどと思い、政行に尋ねると分からないという。恒正は不審に思い、それでは誰が供養するのかと尋ねると、政行は何仏か分からないが、私が供養するので答えた。恒正は政行が仏師なら知つていだろうと尋ねるので、仏師を呼び寄せて尋ねると、分からない、講師が御存知であろうと答えた。実は政行が、ともかく「仏つくり奉れ」というので、仏師は「たゞまろがしらにて斎の冠もなきやうなる物を、五頭さざみたて」ただけで、講師に「その仏、かの仏」と名前を付けてもら

うつもりだったという。^⑮

話末評語に「それを問ひ聞きてをかしかりし中にも、同じ功德にもなればと聞きし。あやしのものどもは、かく希有の事どもをし侍りけるなり」という。これについては、すでに次のように注されてきた。

① 前話同様、造仏をめぐる珍談。ひなびた世界の無智な、しかし、愛すべき人々の信仰生活の一端をほほえましく伝える。作者自身の関与もうかがえる一編としても注目に値しよう。

(新大系)^⑰

② 前話と同じく、造仏と供養に関する語り手の直接の見聞に基づく地方譚。都の常識からすれば、いかにも間の抜けた応答も含まれるが、郎等の仏供養に主人らが協力して事に当るほのほのとした田舎の習俗を描いて好ましい。

(新編全集)^⑱

また、高橋貢氏は、本説話について話末評語をめぐって、次のように批評する。

恒正のもとに滞在している客人や話の書き手は、滑稽譚として扱おうとしたのではないかとみる。この話末評語にみる話の狙いは、何仏であるのかも知らずに仏を作って供養しようとする地方の人の、素朴で人はよいが、無知、ピントはずれな行動、振舞いを、あからさまにいた旅人の視点からとらえたところに

孤立話から見る『宇治拾遺物語』の特質

あろう。^⑲

ここで見逃すことのできないのは、仏像を彫れと言われて、仏師が在来の齋の神のおおまかな印象に拠って造仏しているところである。都においてであれば、病氣治癒に向けてなら薬師如来を、現世利益なら観音菩薩を、極楽浄土を願うのなら阿弥陀如来を求めらるう。ところが、政行は全く屈託がない。むしろ祈請する対象に興味はなく、信仰したいという気持ちだけがむやみに熱い。ところが、説話の編者は、彼等をただ愚かなものとして否定しているわけでもない。信ずる気持のうちに仏は宿るという思想こそ、仏教本来の思想ではなく、在来の宗教的思想に依拠して生成した日本式的思想だといえる。

五 孤立話の思想

もうひとつ、仏教の世俗化を測るのにふさわしい説話が第一三六話「出家功德事」である。その概要は次のようである。

これも今は昔、筑紫国に「たうさか」という齋の神がおられた。その祠に旅僧が宿りしたが、夜、馬の足音がして齋の神に呼び掛ける者があつた。旅僧が聞いていると、馬上の物が齋の神に「あす武蔵寺に、新仏いで給べしとて、梵天、帝釈、龍神あつまり給ふとは知り給はぬか」という。「あすの巳の時」だということで、旅僧は

「希有の事」を聞いたものと、翌日武蔵寺に赴いた。ところが一向にそんな気配はない。巳時を過ぎて午の時に、七十歳余の翁が尼を伴って現れた。二人は、寺の六十歳ばかりの御房を呼び、「御弟子にならんと思ふ也」と告げ、戒を受けて退出してしまった。それ以外、何ごとも起らなかった。

話末評語に「さは、この翁の法師になるを随喜して、天衆も集まり給て、新仏のいでさせ給ふとはあるにこそありけれ。出家随分の功德とは、今にはじめたる事にはあらねども、まして若く盛りならん人の、よく道心おこして、随分にせんもの功德、これにていよくおしはかられたり」という。²⁰⁾

新大系は次のように評している。

山中の祠や、木の洞穴にとどまり、その夜中に神々や鬼神の話や話を聞くという話は第三話のほか、昔話の産神問答などと共通し、本話もその傾向をもつ。「梵天、帝尺、童神あつまり給ふ」という表現は、第一話にも類似表現が見られるが、齋の神の登場や小さな老人の出現など両話間には対比されるものがある。内容的にも第一話が男女のやや乱れた愛の姿を描くのに対し、本話は仲の良い夫婦、そしてその、さわやかな出家劇という内容で、あらためて、第一話の乱りがわしさが浮彫りにされる。

(新大系)²¹⁾

いわく『宇治拾遺物語』の他の説話に認められる「その傾向」とは、「昔話の産神問答」の話柄や聴耳のモチーフであり、「両話間には対比されるもの」もまた、説話間の類似の構成の謂である。しかしながら、問題は、この第一三六話の主題が、俗なる者の出家のうちに仏菩薩は出現するという認識にある。もちろん、出家が仏の出現であるというためには、俗なる存在がもともと仏性を有するということを前提にするものでなければならない。

まとめにかえて

同様の思想は、第八九話「信濃国筑摩湯二観音沐浴事」とも共有するものである。すなわち、第八九話の内容は次のようである。今は昔、信濃国に筑摩湯という薬湯があった。村人の夢に、「あすの午の時に、観音湯欲(あ)み給ふべし」という告げがあった。人々は待ちかねたが、夢に見えた姿どりの男が現われた。人々が男を見てあまりにも礼拝するので、男は困惑してわけを尋ねる。経緯を知った男は、突然「我身は、さは、観音にこそありけれ。こ、は法師に成なん」と弓・やなぎい、太刀などを捨てて法師になってしまふ。見知った人が「あはれ、かれは上野国におはする、ばとうぬしにこそいましけれ」と言ったので、(人々は)馬頭観音と呼んだという。²²⁾ なお、これには後日譚があるが、これについてはすでに論じ

たことがあるので、今は触れない。

繰り返せば、問題は、第一三六話と第八九話とに共有されている思想が、日本的な本覚思想だということにある。かくて、『宇治拾遺物語』全体にわたって散在する孤立話の中に、編者の意図したものの可否かは問わずとも、仏教の教理・教学の次元ではなく、人に仏性ありとする思考はたやすく見てとれるとともに、その基盤に、人に神性を認める在来の思想があり、これと混淆した世俗的思考がある、ということをいわなければならぬ。まさに、そのような思考、認識こそ『宇治拾遺物語』の説話、そもそも編者の隠せない、本来の思想の姿だといえるのではないだろうか。

注

① 厳密な意味で、孤立話の定義はなかなか難しい。『宇治拾遺物語』以前もしくは同時代の文献に、同話・類話・関連話の存在が指摘されれば、説話集『宇治拾遺物語』が一からすべてを作り整えたとは言えない。また現存する文献・資料といっても、かつて存在したそのすべてではないから、『宇治拾遺物語』よりも後代の文献に同話・類話・関連話が存在しても、それが古い出典の痕跡なのか、後代の受容の一例であるかは判別できない。そこで、単純な目安として、すでに同話・類話・関連話の指摘を受けているものがあるかないかという視点で、一定の数字を出してみよう。

一九六〇年に刊行された旧大系において、西尾光一氏は「伝承関係の

孤立話から見る『宇治拾遺物語』の特質

分かっていない五〇余話の大半」は、「民衆の口がたりに裏付けられた民話や世間話」だとする（旧大系、岩波書店、一九六〇年、二〇頁）。その後、同話・類話・関連話が指摘されている。

さらに、一九九〇年に刊行された新大系において、ここにいる意味での「孤立話」を列挙すると、第二話「丹波国篠原村」、第五話「随求ダラニ」、第六話「中納言師時」、第一一話「源大納言雅俊」、第一二話「児ノカイ餅スルニ」、第一三話「田舎尼桜ノ散ヲ見テ」、第一四話「小藤太智」、第一五話「大童子鮭」、第二二話「金峯山」第三三話「太太郎盗人事」、第二五話「狐家ニ火付事」、第五三話「狐人ニ付テ」、第六二話「篤昌忠恒等事」、第七五話「陪從清仲事」、第七六話「仮名麿詠タル事」、第七七話「実子ニ非ザル人」、第七九話「或僧人ノ許ニテ」、第八〇話「仲胤僧都」、第九九話「大膳大夫」、第一〇〇話「下野武正」、第一〇九話「クウスケガ仏供養事」、第一一一話「ツネサガ郎等」、第一二二話「海賊発心出家事」、第一五四話「貧俗観仏富事」、第一五五話「宗行郎等射虎事」、第一五七話「或上達部」、第一六〇話「一条棧敷屋鬼事」、第一六三話「俊宣合迷神事」など、全二八話にわたることが分かる。

もちろんこれらの抽出は、ひとつの目安に過ぎない。ただ、これらは概ね、都市伝説もしくは世間話、噂話など、古くからの書承の説話であるよりも、口承説話ともいうべき、伝承性の強いものが紛れ込んでいるのではないかと見做せる。さらに、これらが説話集の全体から見たときに、部分的には偏在しているのではないかという印象もある。これは、かつて西尾光一氏が論じられた、配列と成立の問題（『宇治拾遺物語』における連纂の文学）『清泉女子大学紀要』第三二号、一九八三年二月）にかかわる可能性もある。その考察の詳細については、他日に譲りたい。

- ② ここでは極端に単純化して問題の所在を際立たせたが、留学生の研究には、日本説話を韓国の口承文芸との話型の共有を指摘することによって、東アジアの書承・口書双方にわたる広がりの中で捉える試みもある（金恩愛、趙智英）。この問題は彼等の今後の研究に譲り、個別『宇治拾遺物語』の説話分析に即して、信仰の世俗化の問題だけを考えたい。
- ③ 浅見和彦・三木紀人校注『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語』岩波書店、一九九〇年、三〇九～一〇頁。なお、一部私に表記を整えたところがある。
- ④ ③に同じ、三〇九頁。
- ⑤ ③に同じ、五五〇頁。
- ⑥ 西尾光一・渡辺綱也校注『日本古典文学大系 宇治拾遺物語』岩波書店、一九六〇年、三四八頁。
- ⑦ ③に同じ、三〇九頁。
- ⑧ 『大正新修大藏経』第二卷、大蔵出版、一九二五年、三四三頁。
- ⑨ 『大日本仏教全書』第九七卷、解題一、講談社、一九七四年、三二三頁。
- ⑩ 『大日本仏教全書』第三二卷、仏書刊行会、一九一六年、一～三頁。
- ⑪ 田村芳朗「本覚法門と心」『本覚思想論』春秋社、一九九〇年、一三八～九頁。
- ⑫ 同書、一五二頁。
- ⑬ 田村芳朗「鎌倉新仏教の背景としての天台本覚思想」同書、三三四頁。
- ⑭ 「鎌倉新仏教における生死観」同書、四二〇～一頁。
- ⑮ 用例の全体は膨大に過ぎるので、全てを掲げることができなかった。
- ⑯ ③に同じ、二三四～七頁。
- ⑰ ③に同じ、二二七頁。
- ⑱ 小林保治・増古和子校注・訳『新編日本古典文学全集 宇治拾遺物語』小学館、一九九六年、二九六頁。
- ⑲ 高橋貢「鑑賞『宇治拾遺物語』（四）——第一一〇（巻第九第五）」「恒正が郎等仏供養事」——『並木の里』第四九号、一九九八年二月。
- ⑳ ③に同じ、二八八～九〇頁。
- ㉑ ③に同じ、二九〇頁。
- ㉒ ③に同じ、一六四～六頁。